

【学園研 B】

1. 研究課題名

劇場・図書館を中心としたアルヴァー・アールトの建築空間構成に関する研究

2. 研究代表者名 所属学部：生活科学部 職名 教授 氏名 戸部栄一

3. 研究分担者 なし

4. 研究成果の概要

アルヴァー・アールトはフィンランドを中心に多くの近代建築を生み出した建築家として知られており、①自然と建築の融合、②群建築による都市空間の形成、③広場・大空間による部分・要素の結合、④洗練されたデザイン手法、⑤直線と曲線の融合、などの空間構成手法がよく知られている。本研究は、特に劇場と図書館を取り上げ、内部空間の形態や構成手法について焦点を絞り、上記のようなコンセプトがどのように具体化されているかを分析することを目的とする。

このために、6箇所の劇場と4箇所の図書館、及び美術館、庁舎など類似の施設計15の建築について図面を比較し、機能構成図を書き、面積割合などを出して分析した。この結果、以下のことが知られた。

- ① 特に規模の大きい施設では、階による機能分離を図っており、下階はエントランス・クロックなどのサービス機能、上階はホワイエ・ホール及びアトリウム・閲覧室などメイン機能としている。ただし、この機能分離はアールトに特有というわけではなく、ヨーロッパのこの種の施設の機能構成として一般的なものである。
- ② アールトは下階と上階を結ぶ階段に配慮しているようであり、上階に上がったとたん視界が開ける、あるいはビスタが展開するドラマチックな構成を意図しているように見える。また、この部分で自然と建築の融合が強く意図されているように思われる。
- ③ この上階のホール部分では、躍動的空間構成が意識されており、上記の視覚的（平面的な）展開と、トップライトや吹き抜け構成による断面的な展開が意識されている。上階のホール部分は、光と開放性により、この種の建築のいわば見せ場として構成されている。
- ④ このホールからは、劇場ではアトリウムが、図書館では閲覧室及び関連する空間が続くことになるが、曲線や曲面はアトリウム・閲覧室に主に用いられており、アールトにとっての曲線・曲面の特殊な位置づけが読み取れる。
- ⑤ 上階ホール部分の空間構成とアトリウム・閲覧室の空間構成とはその構成原理が異なっているように見え、抑制された下階での期待感と上階での2種類の感動・驚きがアールトと建築の特色のように思われる。
- ⑥ もちろん、劇場と図書館、またその規模によって若干の違いがあるが、これは調査した建築のほとんどに共通している。図書館では、ホール部分よりも閲覧室部分の空間構成への配慮が大きく見られる。